

BLな小話 白亜紀ラブソング



招木かざ

「あいつ、うっとうしいの。自由行動で一緒に遊ばないか、だって。冗談じゃないわ。だから、珍しい物でも見つけてきてって、追い払ったわ」

「モテる女はつらいねー」

「だってー、ユキトたちと賭けしてて。あいつがアタシに告げてきたら、アタシの勝ち。賞金もらうもん。でなきゃ、どうしてあんなネクラに」

教室内、というか学校内で一番可愛いと評判の山内が、その取り巻きとキャンプ内の広場でべちゃべちゃ喋っている。

山内が教室で一番目立たない男・中川学に声をかけた、というのは教室内で皆知っている事実だった。

そして勉強以外取り柄のない中川が山内になびくかどうか、というのも教室内で皆知目しているところだった。

なにしろ、教室内でほとんどの生徒が賭けに参加している。そこそこの金が動いている。注目もするだろう。

おれ、朝井太市は賭けに参加しなかった。あほらしい。賭け事に手を出すなんて、金と労力の無駄だ。そんな金があったら、別のことに使う。そうでなくても、中川の心を弄ぶような今回の賭は、やりすぎだ。悪趣味だ。

しかし、そんなことはどうでもいい。

今日は修学旅行の最終日。自由行動のある日。

生徒達は、みな、この日を心待ちにしてきた。

なにしろ、うちの学校の修学旅行先は白亜紀のアメリカ大陸（に、なるであろう場所）。

生の恐竜が見れるのだ。卒業生がタイムマシンの発明家だとかで、そのツテで、うちの学校はタイムマシンを格安で使わせてもらっている。

こんな機会でもなければ、普通の庶民に時間旅行なんて無理だ。

おれは自由行動を、小高い丘にもうけられたキャンプ内を散歩することに決めた。

ティラノサウルスやら、トリケラトプスやらの有名どころの恐竜を見ようと思ったら、オプションツアーに申し込んで、現地ガイドと行動しなければならない。いくらキャンプ近辺に恐竜がいるからといって、しろうとに動き回っている恐竜を見つけ出すことなど無理だし、肉食恐竜は危険だ。

しかし、オプションは高い。なので、キャンプ内の散歩なのだ。しかし、このキャンプ内にも、おもしろい生き物はいる。

やたらでかい昆虫に、カラフルな羽毛をまとった小型恐竜。

別に、大型恐竜をみなくても、そこそこ楽しめる。

そうやって、キャンプをうろついていると、件の中川がいた。キャンプがある小高い丘、そのきわ、ちょっとした崖の上に立っているのを見つけた。

ヒマだったおれは、中川に声をかける。

「おい、中川ー」

「静かに！」

普段、大人しいというか、静かというか、喋らない中川からは想像も出来ない鋭い声で、静かにするように言われた。

おれは好奇心から、中川に近づく。

中川は黙って、崖の向こうを指さした。その方角はなだらかな下り坂になっていて、一番下には草木が生えている。その木々の間に見えるのは、しろうとには発見が難しいはずの恐竜だった。

身体はでかい。多分、十メートルはゆうに超えている。皮膚の色は茶色。二本足で立っている。そして頭には……

「トサカ？」

頭から、変な棒のような出っ張りがある。

「パラサウロロフスだよ。草食の恐竜だ」

確かに、そのパラサウロロフスとやらは、木々の葉を食べている。その顔の表情は穏やかで、優しい顔をしていた。

「朝から、この恐竜を探していたんだ」

中川が呟く。

「この恐竜を？ ティラノサウルスじゃなくてか？」

うちのクラスのほとんどが、オプションを申し込んでティラノサウルス発見ツアーに出かけている。折角の自由行動なのに、オプションに申し込んだら団体行動と変わらないではないか。この点も、おれがオプションツアーに参加しなかった理由だ。

おれは改めて、パラサウロロフスを見る。恐竜には違いない。大きな身体は感嘆に値する。でも、さっきから草を食べていて、世間一般の恐竜のイメージとは違うのだ。ティラノサウルスのような迫力はない。どちらかという、動物園でゾウやらキリンを見ているような、そんな感じだ。

「この恐竜は、素晴らしい能力を持っているんだ」

中川は、なぜか携帯オーディオプレイヤーを取り出した。

「どこが素晴らしいんだ？」

「うん。ぼくは、それを待っているんだ。こうやって、録音準備して」

中川の持つ携帯オーディオプレイヤーは、録音機能も備えているらしい。

けれど、何の音を録音するんだ？

おれがさらに問おうとしたとき、それは聞こえた。

ぶおおおおおおー……

ぶおおおおおおー……

どうも生き物の鳴き声らしい。しかし、妙な鳴き声だった。

何かこう、腹の底に響いてくるような……。

この鳴き声を聞いたパラサウロロフスは、食事を止めてとことこと移動を始める。見た目より身軽だ。

やがてトサカを持った草食恐竜は、木々に隠れて見えなくなった。

妙な鳴き声も止む。

「よし。録音成功だ」

中川が嬉しそうに言った。

「あの変な声は何なんだ？」

「パラサウロロフスの、ラブソングだよ」

「……は？」

「あの恐竜、頭にトサカを持っていただろう」

おれは、パラサウロロフスの姿を思い描く。頭から出っ張った、変な棒。

「あのトサカは、中が空洞になっているんだ。で、声を、あのトサカで反響させて、大きくすることができる」

「ラブソングってのは？」

「パラサウロロフスのトサカは、なんのためについているのか、色々な説があって……その中に、パラサウロロフスは求愛の歌を歌ったんじゃないか、って説があるんだ。恐竜は鳥の先祖だろう。現代の鳥は、求愛の時にきれいな声で鳴く鳥がいる」

「だから、恐竜もラブソングを歌うって？」

中川は頷く。ひどく嬉しそうに。

「しかし、求愛の歌なんぞ録音して、どうするんだ？」

「ぼく、音痴でさ」

携帯オーディオプレーヤーを撫でながら、中川は言う。

「ある人に、カラオケに誘われたんだ。その時、ラブソングでも歌ってみてってリクエストされて。でも、ぼくは上手く歌えなかった。その人も、ぼくがあまりに音痴だから、がっかりしていた」

それは、山内のことか。

「ひとりカラオケで歌を練習したけれど、ぼくの音痴は手をつけられない。それくらい酷いんだ。でも、その人ががっかりされたままだ嫌で。その人、折角白亜紀に来たんだから、珍しいものが見てみたいって。だから……」

「ラブソングを、聞かせようと思うのか？」

中川は、そっと目を閉じた。おれは何か言いたいのだが、それを口にしていいものかどうか、迷う。

やがて、時間旅行の際、旅行会社から「安全のために」と取り付けられた、腕時計型の携帯通信機から、自由時間が終わったことを告げる音が鳴った。

「もー、サイテー、あの男。アタシに変な生き物の鳴き声を聞かせるのよー」

「モテる女はつらいねー」

「本当、賭けでもなけりゃ、あいつに声なんて掛けないわよ。でも、これで、お小遣いが入ったー」

「いーなー。奢ってよー」

白亜紀のキャンプ内につくられた、特大のテント。そこは食堂になっていて、最後の夜だからと、バイキング方式の食事会がひらかれていた。

「大昔に時間旅行って聞こえはいいけれど、ここってそんなに楽しくないよね。気温は暑いし。恐竜のかな？ 変な臭いはするし」

「まだ、普通の海外旅行の方がいいよねー。ショッピングができるからさ」

山内は目立つ。取り巻きをひきつけているから余計に。しかも声が大きいから、聞きたくもない声まで聞こえてくる。

おれは、テントの中、中川を探し回った。見あたらない。

同じクラスの男子を見かけたので、中川を知らないか、と聞いてみた。

「あー、暗い顔して、テントから出て行ったぞ。ふられたのが堪えたのかねえ。っていうか、あいつもバカだよなあ。山内なんて美人が、中川みたいな根暗に下心でもなきゃ、近づかないっての」

おれはテントを出る。

確かに、中川はバカかもしれない。山内の人間性を見抜けなかった。

でも、あいつは真剣だった。パラサウロロフス。白亜紀のラブソング。

中川はどこだろうかと考えて、昼間、ラブソングを聞いた場所に向かう。

おれの予想通り。中川はそこに、座っていた。

「隣、いいか？」

声を掛けて、座る。キャンプ内は肉食恐竜がやって来ないように、必要以上にライトで照らされている。中川の表情はしっかりと見える。涙の後が見えた。

「ぼく、バカみたいだね」

「そうかもしれない。でも、山内はもっとバカだ。お前みたいないい男を振るなんて」

「え？」

おれは、ひとつ深呼吸する。

「おれの噂、聞いたことは？」

「えっと、その、中学で男の後輩に告白したって……」

「そう。おれは、男しか好きになれない。あの後輩のことは真剣に好きだった。でも、翌日には、おれは学校中の笑いものになった。後輩が、男同士なんて、とクラスメイトにメールを送って、そのメールがあちこちに転送されたから」

「……」

「それ以来、おれは臆病になった。誰かを好きになっても、告白なんてしないでおこうと思った。でも」

「でも？」

「おれは、今日、白亜紀のラブソングを聞いた……」

白亜紀の夜は、意外なほど静かだ。多分、下手に鳴き声をだしたら、肉食恐竜に襲われるからだろうけど。

「好きな人、いるの？」

中川が問う。

「ああ。最近、好きになった人なんだ。この修学旅行で、意外な面が見れたんだ。それで好きになったんだ」

おれは中川を見る。

パラサウロロフス。

好きになった存在には、思いを伝えないといけない。

「その、友達からでもいいから、おれと……」

おれが好きになった人は、目を丸くしている。

BLな小話 白亜紀ラブソング

<http://p.booklog.jp/book/65001>

著者：招木かざ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gotoji/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/65001>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/65001>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ